



経済学分野における海外大学院留学のススメ : 実践的アドバイス (〈特集〉大学院で経済学を学ぶ)

西山, 慎一

(Citation)

国民経済雑誌, 221(1):51-59

(Issue Date)

2020-01-10

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/E0041958>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/E0041958>



国民経済雑誌

経済学分野における海外大学院留学のススメ：
実践的アドバイス

西 山 慎 一

国民経済雑誌 第221巻 第1号 抜刷

2020年1月

神戸大学経済経営学会

経済学分野における海外大学院留学のススメ： 実践的アドバイス

西 山 慎 一^a

1 はじめに

本稿では、経済学分野において将来的に海外大学院に留学し、修士号あるいは博士号（Ph.D.）を取得することを少しでも検討している学生を対象に実践的なアドバイスを行う。想定している読者は、経済学部や法学部など経済学部以外の学生であっても将来的に経済学の修士や博士の学位を取得したいと考えている学生にとって有用なアドバイスになると確信している。事実、筆者は私大文系の教養学部出身であり、経済学部出身ではないが、学部卒業後すぐに米国大学院経済学研究科博士課程（5年課程の Ph.D. プログラム）へと進学することに成功している。筆者のこうした経験を踏まえて後進の学生にアドバイスを行いたい。

ここで簡単に筆者の経歴を紹介しておこう。筆者は1993年に国際基督教大学教養学部に入學し、1995年から一年間のテネシー大学ノックスビル校への交換留学を経て、1997年に教養学部を卒業した。同年9月から米国オハイオ州立大学コロンバス校の経済学研究科博士課程に進学。2002年に Ph.D. を取得し、日本銀行金融研究所でエコノミストを3年間、カナダ銀行でシニア・アナリストを5年弱、内閣府経済社会総合研究所で主任研究官を1年間務め、2011年から大学での研究者に転じて、東北大学経済学研究科准教授として6年間、2017年から現職である神戸大学経済学研究科教授を務めている。本稿では、筆者の経験と実体験をベースに、経済学分野における海外大学院留学（特に米国大学院留学）に関する実践的なアドバイスをを行う。

2 海外大学院留学の意義とメリット

2.1 大学院進学の意味：国内と海外の違い

まず大学院進学の意味を確認しておこう。日本では、特に文系分野では、大学院へと進学

a 神戸大学大学院経済学研究科, nishiyama@econ.kobe-u.ac.jp

すると民間企業への就職が難しくなるとされているためか、大学院進学は一般的な学生からはリスクと見做されている。そのため国内では、研究者を強く志向する学生でない限り大学院進学は敬遠されがちであるが、海外では全くそうではないということをまず認識しておく必要がある。欧米をはじめ、中国、インド、東南アジア、オーストラリアなどでは、研究者志向の学生に限らず、一般的に優秀な学生は大学院へと進学する傾向が強い。海外においては、修士号や博士号を取得することで専攻分野における専門知識とスキルを備えたエキスパートと社会から認知され、就職や昇進において有利となる。実際、海外における高度専門職の募集条件では、最低でも修士の学位が必須であることが当たり前であり、場合によっては博士の学位が求められるケースも数多い¹⁾。それゆえ、学生もたとえ研究者志向でなくとも、エキスパートとしてより良い企業でより良い待遇を得るために、こぞって大学院進学を目指すという図式が成立している。結果として、優秀な学生のみが大学院進学を果たすことができ、その中でもさらに優秀な大学院生のみが博士後期課程へと進学できる。このように海外では、どの専攻分野であろうとも修士号や博士号を取得することがエキスパートになるための登竜門となっているのである。学士号しか取得していない者がエキスパートとして認知されることは、海外ではまずあり得ないと考えていい。

2.2 海外大学院留学のメリット

このように海外の大学院には優秀な学生が集まっており、特に有力な海外大学院には世界各地から俊英達が集まってくる。有力な海外大学院へと留学を果たし世界中の俊英達と切磋琢磨することで、専攻分野のエキスパートと呼ばれるにふさわしい知識と世界水準の実力が自然と身につく。また在学中の交流を通じて友情を育むことで、大学院修了後もグローバルエリート達とグローバルなネットワークを形成できることはキャリア上の大きな財産となるだろう。もちろん学生だけではなく、有力な海外大学院の教員は世界的に影響のある研究者であることも多いので、そのような研究者から直接薫陶を受けることはエキスパートとして成長する上で何事にも代えがたい貴重な経験となるだろう。

また実利的な側面も無視できない。経済学分野の有力な海外大学院を修了し Ph.D. を取得できれば、国内外の大学や研究機関における研究者の道はもとより、国際機関や海外中央銀行でのエコノミストの道が開かれることになる。近年では、GAF に代表されるようなグローバル IT 企業でも Ph.D. エコノミストを積極的に雇用しており、Athey and Luca (2019) によれば過去 5 年間で何百人もの Ph.D. エコノミストがグローバル IT 企業に就職している。顕著な例として、Amazon は過去 5 年間に 150 人以上もの Ph.D. エコノミストを雇用しているとのことである。また GAF などグローバル IT 企業におけるエコノミストの年収は高く、初任給で 1000 万円から 2000 万円の年収を期待できる。

このように有力な海外大学院で経済学 Ph.D. を取得することのメリットは非常に大きいと言える。国内外どこでも就職先があり、大学、国際機関、政府機関、中央銀行、投資銀行、コンサル、IT 企業など就職先はほぼ全てのセクターにまたがるほど選択肢は広く、年収も同年代の日本のサラリーマンとは比較にならないほど高収入なのである。

3 海外大学院留学への道

経済学分野での海外大学院留学のメリットが分かったところで、次に海外大学院留学を果たすための実践的なステップをアドバイスする。海外大学院留学は個人にとって極めて難易度の高いミッションではあるが、それは効率的な方法を日本人学生が知らないからという理由が大きい。海外大学院留学を果たすための効率的なステップさえ知っていれば、一般的な日本人学生であっても無理なく海外大学院留学を果たすことは十分に可能である。ここで示すアドバイスはあくまでも理想的なステップではあるが、これに従えば比較的スムーズに海外大学留学を果たせると筆者は確信している。なお本稿では、主に経済学分野における米国の大学院を想定している点に留意して頂きたい。

3.1 学部時代の過ごし方

まずは学部時代の過ごし方であるが、海外大学院への留学を目標とするならば、大学入学後すぐに具体的な行動に移すことを勧める。大学入学直後は新生活に慣れることで手一杯ではあるが、大学1年生の夏休みにぜひ短期（5週間程度）の英語圏への語学留学に行ってみよう。まずは英語に慣れることが重要であり、英語圏でひと夏を過ごすことにより英語を生きた言語として感じる事ができれば、その後の英語学習のモチベーションが格段に上昇する。近年はどこの大学でも夏季の短期語学留学のプログラムが用意されているので、積極的にそのプログラムに参加すると良いだろう。大学2年生の夏休みも同様に、英語圏（できれば1年時とは違う国）への語学留学（できれば上級の語学プログラム）へ行くと良いだろう。1年生の時とは違って、海外での生活様式に慣れていることや英語力が上昇していることで、より語学留学を楽しむことができるだろう。海外での生活が楽しいと感じることができれば、海外大学院留学に向けた第一段階としては成功である²⁾。

並行して海外大学院出願時に必須となる TOEFL の勉強も大学1年生の時点から始めると良いだろう。TOEFL の勉強は大学院出願の直前まで継続することになるが、早めに勉強を開始することが最善の準備である。語学留学を経験しておけば、その相乗効果で TOEFL のスコアも学年が上がるにつれ自然と上昇していくことだろう。できれば3年時の交換留学（後述）の前までに TOEFL iBT スコアで80点以上を取ることを目標に勉強するといいたいだろう。

さて学部時代に準備することは英語だけではない。英語と同様か、それ以上に重要なのが数学と統計学である。経済学分野の海外大学院では英語が出来ることは当然であり、むしろ数学や統計学に関する知識とスキルが大学院で成功するためのカギとなる。大学院側もこれを十分に承知しており、大学院出願時の書類選考においては学生の学部時代の数学と統計学の成績を極めて重要視している。特に微分積分、線形代数、統計学の科目は最重要科目であり、これらの科目でA評価（日本の大学では90点以上）を取ることが大学院合格のための近道と言っても過言ではない。学部時代は、たとえ必修ではなくとも出来るだけ多くの数学と統計学の科目を履修し、これらの科目でA評価を取ることに全力を尽くすことが肝心である。数学と統計学の科目は経済学部で提供されている科目だけでは不十分なので、理学部や工学部で提供されている本格的な微分積分（多変量の偏微分と多重積分）、線形代数、微分方程式などの科目を履修するのが理想的である³⁾。

数学や統計学の話が先に出てしまったが、もちろん経済学科目の成績も重要である。特に中級ミクロ経済学、中級マクロ経済学、計量経済学は経済学のコア科目とされており、これらのコア科目でA評価を取ることは極めて重要である。まさにエコノミストとしての才能が試される科目であるので、これらコア科目の成績が悪いと書類選考の際に大変印象が悪い。逆に言えば、全力を尽くしたにも関わらずコア科目でA評価が取れないようであれば、自分のエコノミストとしての才能を疑うべきかもしれず、経済学分野での大学院進学が本当に自分にとっての最善のキャリアパスなのかどうか再考すべきだろう。

学部時代のGPA（Grade Point Average、成績評価平均点）についても触れておこう。米国をはじめ海外では、学生が大学でどれだけ真面目に学業に取り組んだかを見るためにGPAが大変重要視されている。日本では学生も社会もGPAを軽視する傾向があるが、海外大学院留学を果たす上では低いGPAは致命傷となるので、GPAは絶対に疎かにしてはいけない。米国や海外の大学院では、GPAが3.00未満（4.00を満点として）であれば足切りの対象となる可能性が高い。理想的にはGPA 3.50以上（つまりA評価（秀）が過半数）を維持した上で海外大学院に出願することが望ましい。特にトップスクールと呼ばれる大学院に入学するためには、GPA 3.50以上は必須条件と考えるべきだろう。

3.2 交換留学の勧め

海外大学院留学を果たすためのステップとして、学部時代に交換留学に行くことは極めて効果的なステップである。できれば3年時に英語圏の大学に1年間フルで交換留学に行きたい。交換留学に行くことのメリットとしては以下が挙げられる。1) 大学の授業を全て英語で履修し日常生活を全て英語でこなすことにより、英語力が飛躍的に向上する、2) 海外の大学での講義スタイルに慣れることにより、海外大学院留学を具体的にイメージするこ

とができ将来的にスムーズに移行することができる、3) 海外の大学生に伍して講義を受けることにより、自分が世界でどれだけ通用するかを確認することができる、などである。

実際に交換留学に行ってみればわかるが、英語の問題さえクリアできれば、日本の難関国立大学に合格するような学力を持つ学生は、世界でも十分に通用するのである。交換留学に行き海外の大学生に伍して授業を受け、履修した科目でA評価を取ることができれば、海外大学院でもやっていけるという確固たる自信が生まれるだろう。

ちなみに米国の大学でA評価を取ることは、実はそれほど難しいことではない。要求される勉強量は確かに多いが、真面目に課題をこなし、真面目に試験勉強に取り組めば、実は日本の大学よりも確実にA評価が取りやすい。努力がきちんと報われるような成績評価システムが米国の大学では定着しており、日本の大学の様に運に左右されるということはあまりない。事実、筆者はテネシー大学で1年間、合計10科目の講義を履修したが全ての科目においてA評価を得ることができた。これは運が良かったということではなく、着実にやるべき事をこなし狙って取ることができたストレートA（日本で言うところの「全秀」）であると自負している。なお交換留学中に履修することを推奨する科目については西山（2018）に詳述しているので、そちらも参照して頂きたい。

交換留学中は英語の勉強、特にTOEFL対策やGREのVerbal対策も進めておくといいだろう。英語力については交換留学中にピークに達するので、そのピークのタイミングに合わせてTOEFLを受検するのが最適戦略である。おそらく帰国直前に現地でTOEFLを受検しておくのがいいだろう。帰国してからTOEFLを受検すると、どうしてもリスニングやスピーキングの面で英語力が劣化しており、ハイスコアを狙う上では効率が悪い。有力な海外大学院で要求されるTOEFL iBTスコアは100点以上であることを念頭に置き、交換留学中は100点以上が取れるまで何回でもチャレンジするべきだろう。

3.3 国内大学院修士課程の活用

さて交換留学から帰国すれば卒業論文の準備に取り掛かることになる。当面はそちらで忙しくなるであろうが、GRE（Graduate Record Exam, 米国大学院に入学するためのセンター試験のようなもの）に向けた試験対策および海外大学院への出願も具体的に準備する段階である。筆者は交換留学から帰国後、卒業論文に関する研究を進めるとともに、GREの試験対策を進め、米国大学院への出願も行い、幸いにもオハイオ州立大学大学院とミシガン州立大学大学院から合格通知を頂くことができた。これを受け、卒業後すぐに渡米したわけであるが、振り返って考えてみると学部卒業後すぐに米国大学院Ph.D.プログラムに進学するのは、いくつかの点で時期尚早であったと考えている。

まずオハイオ州立大学の Ph.D. プログラムに入学して気づいたこととして、同期入学者25名程度の内、半数以上がすでに経済学あるいは統計学の分野で修士号を取得済みであった。学士号しか取得していない学生が筆者を含め少数派であったことには面食らった覚えがある。特に中国や韓国やインドなどの海外からの留学生は、自国において修士号を取得した上で米国の Ph.D. プログラムに進学することが普通のものであった。筆者は教養学部出身ということもあり、学部時代に履修した経済学の科目は限定的で、修士レベルの高度な経済学に至っては全く勉強したことがなかった。そのため大学院1年目のコースワークで経済学修士レベルの知識をすでに持っている同期生と伍して行くには大きなハンデがあったと感じている。

そこで自戒の念を込めたアドバイスとしては、学部在学中の間に中級レベルのミクロ経済学とマクロ経済学だけではなく、可能であれば上級レベル（大学院修士レベル）のミクロ経済学とマクロ経済学を履修しておくことを強く推奨する。より現実的なステップとしては、海外大学院に進学する前にまず国内の大学院修士課程に進学し、そこで上級レベルのミクロ経済学、マクロ経済学、計量経済学を修め、修士号を取得してから海外の Ph.D. プログラムに進学することが妥当なステップであるとアドバイスしたい。実際、日本人経済学者の内、学部卒業後に直接海外 Ph.D. プログラムに進学した例は稀であり、多くの場合は国内の大学院修士課程を経て海外 Ph.D. プログラムへと進学している。

海外大学院に留学する前に国内の修士課程に進学することのメリットは他にもある。それは経済学を真剣に学びたいと考えている大学院生と一緒に勉強することで、経済学への理解や興味がより一層深まっていくという点である。また大学院レベルのどの教科書が優れているのかわかりやすいか、海外大学院のどこが狙い目か、GRE の効果的な試験対策など、大学院生にとって有用な情報についても簡単に入手することができる。学部生ではなかなか情報が集まらず、上級レベルの経済学や GRE 対策を独学で勉強していくことには困難が伴うが、経済学の「マニア」である大学院生達に囲まれて勉強したり情報交換をすれば、上級レベルの経済学を学習していくことも海外大学院へ進学することも相対的に容易になる。さらに国内における将来的な人的ネットワークを形成する上でも、院生時代に国内の修士課程で「経済学者の卵」達と友誼を結んでおくことは、後々キャリア上の大きな資産となるだろう。

ただし進学先は国内のどの大学院経済学研究科でも良いという訳ではない。国内の優秀な大学院生が数多く集う、有力な大学院経済学研究科修士課程もしくは博士前期課程に進学することが肝要である。⁴⁾本稿では具体的に国内のどの経済学研究科に進学すべきかについては言及しないが、国内で上記の条件を満たす経済学研究科は5つ程度しかない⁴⁾とだけはお話しておく。

3.4 米国大学院出願の準備、海外大学院の選び方

国内で修士号を取得あるいは取得見込みとなったなら、次のステップとしてぜひ海外大学院 Ph.D. プログラムへの進学を検討してみたい。この段階にまで到達していれば、海外大学院 Ph.D. プログラムへ出願する条件はほぼ整っているはずである。理想的には、修士課程のコースワーク（ミクロ経済学、マクロ経済学、計量経済学）においてストレート A 評価を取っており、修士論文を英語で書き上げ査読付きの国際学術誌に投稿できるクオリティにまで仕上げてあれば、条件としては完璧である。米国大学院への出願準備としては、TOEFL スコア、GRE スコア、成績証明書（学部と大学院）、研究計画書（修士論文があるなら添付）、3 通の推薦状などを準備する必要がある。GRE 対策や推薦状の確保は思いのほか時間が取られるので、計画的に余裕を持って準備を進めておくことが望ましい。本稿では米国大学院出願に関するアドバイスについて紙面の都合上割愛するが、インターネット上で公開されている Kudamatsu (2017) による「経済学大学院留学ガイド」や Miura (2014) による「経済学 phd 出願の記録」などが大変参考になるだろう。

次にどの海外大学院に出願するかであるが、米国大学院の研究力や名声を指標化した US News & World Report (2017) による“Best Graduate School Ranking”は、米国内では大変有名なランキングであるので出願する際に参考にすると良い。また米国以外の大学院を含めたランキングでは Times Higher Education (2019) の分野別研究ランキングが参考になるだろう。近年では、シンガポール国立大学、南洋理工大学、オーストラリア国立大学をはじめ、アジア・オセアニア地域の大学院も研究水準が伸長しているので、これらの海外大学院も留学先の候補として検討するのもいいだろう。

4 結 語

海外大学院 Ph.D. プログラムへの進学は個人のミッションとしては確かに難易度が高い。しかし本稿で詳述したように一つ一つ着実にステップを踏んでいけば、一般的な日本人学生であっても海外大学院留学を果たすことは十分に可能であると筆者は確信している。高校時代、数学で赤点を連発して私大文系に行くことを余儀なくされた筆者であっても可能だったのである。英語と数学 IIB をしっかりと勉強し、難関国立大学に合格できる学力のある学生であれば、海外大学院 Ph.D. プログラムへの進学は現実的に十分可能なミッションであると断言できる。ただ必要なことは、ミッション達成に向けた着実な準備とそれを継続する意志の力である。

しかし晴れて海外大学院 Ph.D. プログラムに進学を果たしたとしても、それはまだ一人前のエコノミストになるための訓練期間でしかなく、エコノミストとしてのキャリアのスタート地点にさえ立っていないことは知っておいて欲しい。Ph.D. プログラムのコースワークで

成功を修め、博士論文を書き上げて Ph.D. の学位を取得し、どこかの大学、研究機関あるいは企業のエコノミストの職位を勝ち取って、やっとエコノミストとしてのキャリアのスタートである。Ph.D. エコノミストになるための道は長く険しいが、その分メリットの大きなキャリアパスでもある。本稿を読んだ学生の中から一人でも多くの Ph.D. エコノミストが誕生すれば、筆者にとっては望外の喜びである。

注

- 1) 経済学の分野では、例えば国際通貨基金 (IMF) のエコノミストになるためには博士の学位が応募条件となっている。また海外の中央銀行、たとえば FRB や ECB などでもエコノミストの応募条件として博士の学位が要求されている。ちなみにこれらのエコノミスト職は管理職などの高位職ではなく、あくまで新人のエコノミストの話であり、博士号を持たない者は IMF や FRB や ECB のエコノミストとしてのスタートラインにさえ立つことができない。エコノミストに要求される学位については、西山 (2018) を参照のこと。
- 2) なお神戸大学経済学部では、グローバル人材育成を目的とした IFEEK という国際教育プログラムが提供されているので、経済学部の 1, 2 年生はぜひこのプログラムに参加して欲しい。IFEEK では英語による特別演習や英語による経済学科目の講義が提供されており、3 年時に無理なく交換留学に赴くことができるよう配慮されている。なによりグローバル人材になるという高い志を持った仲間と IFEEK プログラムを通じて互いに切磋琢磨することで大きく成長することができる。
- 3) とは言え、理学部や工学部の学生と伍して数学の科目で A 評価を取ることは、文系の学生にとっては至難のワザではある。そこで交換留学先で数学の科目を履修するという「裏技」を筆者は推奨したい。実は日本の数学 IIB を勉強してきた文系の学生は、海外では十分に数学のスキルが高い部類に入る。このアドバンテージを活かして、海外の大学で微分積分、線形代数、微分方程式などの数学科目を履修すれば A 評価を取ることは比較的容易である。事実、筆者はテネシー大学で上記の科目を履修し、私大文系の学生であるにも関わらず見事全科目で A 評価を取ることができた。詳しくは西山 (2018) を参照して欲しい。
- 4) なお神戸大学経済学研究科には、英語による経済学修士プログラムである GMAP コースがあり、修士レベルの経済学科目を英語で学び、修士論文についても英語で書くよう指導が受けられる。海外 Ph.D. プログラムへの橋渡しとしては絶好のプログラムであるので、興味のある学生はぜひ検討してみて欲しい。
- 5) 本稿では紙面上の制約のため、海外大学院でのサバイバル術について述べることはできなかったが、別の機会があればこの点についても実践的なアドバイスを行いたいと考えている。Kudamatsu (2017) では、米国大学院でのサバイバル術やジョブマーケットにおける戦略についても書かれているので、興味のある学生はぜひ一読することを勧める。

参 考 文 献

Athey, Susan and Luca, Michael (2019), "Economists (and Economics) in Tech Companies," Harvard

Business School Working Paper 19-027.

Kudamatsu, Masayuki (2017), 「経済学大学院留学ガイド」,

<https://sites.google.com/site/econphdryugaku/> (最終閲覧：2019年8月31日)

Miura, Ken (2014), 「経済学 phd 出願の記録」,

<https://kenmiura.com/2014/02/02/%E7%B5%8C%E6%B8%88%E5%AD%A6phd%E5%87%BA%E9%A1%98%E3%81%AE%E8%A8%98%E9%8C%B2/> (最終閲覧：2019年8月31日)

Times Higher Education (2019), “World University Rankings,”

<https://www.timeshighereducation.com/world-university-rankings> (最終閲覧：2019年8月31日)

US News & World Report (2017), “Best Graduate Schools,”

<https://www.usnews.com/best-graduate-schools> (最終閲覧：2019年8月31日)

西山慎一 (2018), 「経済学の学び方, 経済学を活かしたキャリア形成：実践的アドバイス」, 国民経済雑誌別冊『経済学・経営学学習のために』, 平成30年度後期号, 45-56頁.